
このサーカス団には、異世界から来た猛獣使いがいます。

星野由羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ここのサーカス団には、異世界から来た猛獣使いがいます。

【Nコード】

N2771Y

【作者名】

星野由羽

【あらすじ】

激小サーカス団でアルバイトをしている大学生、陽斗は、公演中にある少女と出会う。

その不思議な少女は、異世界から来た、本物の猛獣使いだった——！？

団を有名にすべく、少女と陽斗、その他もろもろが頑張ります。

1 サーカス団、公演中。

暗めのライトアップの中、スポットライトが当たる女性が、まるで宙を歩いているかのようなバランスで、一本の細いロープを渡る。途中、ジャンプをしたり、スキップをしたり。落ちたかと思えば、九十度に折った足をロープにかけ、逆さづりでにこやかに手を振る。会場は、観客が息をのむ音と、不思議な音楽しか聞こえない。

「団長、今日は大盛況ですね」

ステージ裏で、気の強そうな瞳の十代の男子が、近くにいた、でっぷりとしたお腹のおじさんに、うきうきとした声を出す。

「そうだな、陽斗^{はると}。いつもよりはました」

フラフープを持って、またロープを渡ろうとする女の人を見て、おじさん——団長——が、満足げにうなづく。

「俺も、チケット売っていて気が付いたんですよ。いやー、五十人も入るなんて、何年振りですかね？」

「知らん。この公演もこれで最後だ。気を抜くんじゃないぞ」

「わかっています」

男子——陽斗——が、真剣な表情でうなづく。

最後の仕事を終わらせに行こうと、彼は歩き出した。

陽斗の仕事は、この激小サーカス団——トロイメライサーカス団——の、小道具づくりや、照明や、チケット販売など、とにかく裏方の仕事をやっている。

今は死んでしまったが、父がこのサーカス団に入っていたことや、中学、高校と演劇部で、裏方の仕事は大半わかっているということから、バイトをしているのだ。

ただ、普段は地元のあまり有名でもない大学に通う、十八歳だ。

陽人は長めの階段を登り切り、大きな照明の裏にいた。

「最後の仕事——。照明を一気に落とすことつ。これか」

ステージではそれぞれの団員の紹介が終わり、幕を下ろすところだ。

彼は、目の前にあった大きなボタンを見て、少しビビる。が、思い切り、えい、と押した。

しかし、ステージの電気だけが落ちない。

「どうなっているんだ……？」

その時、背後に気配を感じ、体ごと後ろを向く。すると、そこにいたのは——、

「ねえねえ、電気が落ちないのはあたしの使い魔のせいだってば。保護してよ。頼むから——」

真っ赤なローブを着た、十六、七の少女だった。

2 サーカス団、混乱中。

「聞いているのか？」

目を丸くし、びつくりした表情の陽斗に、ぺちぺちと軽く平手打ちを食らわす、少女。

その効果なのかわからないが、陽斗は少女の目を見て、真剣に聞く。

「迷子？」

「真剣な表情でそんなこと聞くなーっ！」

べしーん、と大きく平手打ちをされ、陽斗はしりもちをつく。

自分より下にいるのが安心したのか、少女は仁王立ちで、堂々と自分の名前を述べた。

「あたしは、異世界から来た猛獣使い、レオーだ！」

「……………」

しばらく、沈黙が続いた。

それに耐えきれなくなったのか、少女——レオー——が、陽斗の目の前で手をひらひら振る。

「おーい、どうしたー？」

「……………はっ。フリーズしてた」

「おお、目が覚めたな。それじゃあ、ピカルを回収するのに、手伝ってくれ」

「……………」

「どうした？ またフリーズしたぞ？ そうか、お前はそんな癖があるのか。わからないことがあったらとりあえずフリーズするのだな。ピカルとは、使い魔の名前で——」

「そんなこと聞いてねえ！ おい、お前何歳だ？ そんな年になって迷子で、しかも意味の分からないこと言っていると、いじめられるぞ」

陽人の答えが不満だったのか、レオーがぶう、と頬を膨らませる。

「本当なんだつてば。もう少しでステージに落ちちゃうぞ。ピカル、宙に浮いてられるの、三分程度だから」

は？ と、陽斗が顔をしかめた、その時——。

ぼてつ。

ざわついていたステージ上に、何か、丸い発光しているものが落ちてきた。

一見電球のようだが、よく見ると小さい羽根が付いていて、目もある。音からすれば、硬くはないのだろう。

そして、上のライトがステージを照らしていたと思っていたのだが、上の大きなライトは、発光していない。

代わりに発光しているのは、落ちてきた物体だ。

「——は？」

「あーあ、ピカル、落ちちゃった。ほら、回収に行くぞ」

ひらりとロープを翻し、レオーはステージへの階段を下りて行った。

「あ、おい待てよ！」

慌てて陽斗もあとを追いかける。

その途中、チラリとステージの方を見たが、団員はみな、落ちてきた丸いものを取り囲み、触るか触らないかを検討しているところだった。観客は、ただ、ざわつくしかない。

そうこうしているうちに、意外と足が速いレオーがステージの上に到着した。

「げっ！ あいつ、何する予定だ！？」

陽人は、駆け降りるスピードを速めた。

ステージでは、胸を張ってゆっくりと歩くレオーが、丸い生物に近づいているところだ。

「おいっ！」

陽人もステージについた。今まで強く発光していた生物は、光を弱めている。

「陽斗か！？」

今、会場に光は一切ない状態だ。人の顔も認識しづらい。

「そうです。あの、少女が乱入——」

「少女じゃない。レオーだ！」

くる、と振り返り、不満そうにほっぺをふくります少女は、例の丸い生物に手を差し伸べる。

「ピカル。ごめんね、はぐれちゃって」

ぴか、と光が強くなる。

「おーそうか。嬉しいのか。あたしも嬉しいよー」

「ちょっと待った！ お嬢ちゃん、きみ、なんなのだね！」

団長がツッコむ。

すると、うつとおしそくに団長を見ながら、レオーはさらに詳しく身分を説明した。

「レオラール・シー。国王様に言われて、異世界から送られた、十七歳の、猛獣使いだ。こいつは使い魔のピカル。光るのだけが取り柄だ」

腰に手を当て、エッヘンとでもいう風なレオーに、ステージ上の人すべてがフリーズした。

「こいつ、なんなんだ——……？」

誰かが、もつともな意見を言った。

3 サーカス団、戦闘中。

「とっ……、とにかく幕を下ろそう！ みなさん、本日はありがとうございましたー！」

無理やり幕を閉じようとする団長に、観客はブーイングだ。
だが、紺色の幕が降りてきて、目の前がシャットダウンされる。

「……団長、すごいブーイングですよ。これからお客さん、減るんじゃないですか……？」

「あ？ わしは何も聞こえない」
「都合よく消音しますね」

団長にツッコんだのは、道化師ビエロの菅原すがわら 忠士ただしさんだ。

真っ赤な鼻と、目の周り。オレンジや赤の派手な衣装を着て、黄色く染めた髪。そして何より目立つのは、真っ青に染めた目の下の涙だ。

彼は、団長とは長い付き合いのようで、陽斗の父が入っていたときも、いたような覚えがあった。

菅原は、道化師ビエロのくせに、オフではツッコミキャラなのだ。

「ところで、コノ子ウザいんだけど。あのねえ、ここの猛獣使いは、このあたし、白鷹しらたか 愛衣ういなんだからね」

腰に手を当て威張っているのは、陽斗の幼馴染、白鷹 愛衣。
茶色く染めた髪に、派手なメイク。露出の多い服は、あちこちにひもがぶら下がっている。特に目立つのは、腰に巻いた鞭。

「愛衣。まあまあ落ち着けって」

陽人がなだめるが、愛衣はふん、と顔をそむけ、

「あたしだって仕事がなくなったらいやだもん」

唇を尖らせ、怒ったように目を閉じる。

その表情に反応したのは、舞台袖で、オリに閉じ込められた、ライオンだか象だか、猛獣たちだ。

「あたしは身分を言っただけですけど」

「それが嫌なのっ！ 団長、こんな子、雇おうとか思いませんよね
！」

え、まってあたし雇われたいとか言っていない——そういおうとしたが、団長に先を越される。

「それは見なくてはダメだな」

というわけで、二人の猛獣使い合戦（？）が始まった――。

「それでは、愛衣対レオーさんの、猛獣使い合戦（？）を始めたい
と思いますっす！」

「いえーい、志桜里^{しお}ちゃん、かわいいよー！」

はやし立てた団長に、志桜里、と呼ばれた女性は、近くにあったジャグリング用のボールを投げつける。

彼女は城田^{しろた} 志桜里。主に空中ブランコを得意とする、綱渡り、トランポリンと何でもOKな体の柔らかい女性である。胸あたりまで伸びた黒髪は、揺れるごとにシャンプーのにおいがふわりと香る。整った、フランス人によく似た顔立ちは、どの表情でも、美人だ。

「団長！ はやし立てないでください！」
「わかったって。さて、続き続き」

まったく、と唇を尖らせる志桜里だったが、すぐに営業スマイルをし、舞台袖をさす。

「今回の主役の一人、野性的な肉食ガール、白鷹あー、愛衣！」

ぱちぱちと団員のまばらな拍手の中登場したのは、少し恥ずかしそうに顔を赤らませる、愛衣。

「あたしの実力、見せてやるからね！」

こぶしを握る愛衣に、心底どうでもよさそうな団員。
どうやら、猛獣使いの一人や二人、変わっても関係なさそうだ。

そんな空気を換えようと、志桜里は精いっぱい声をだし、次の人物を呼ぶ。

「さあ、異世界から来た自称・猛獣使い、レオラール・シー！」

もはや拍手もしない団員の前に、うきうきとした表情のレオーが登場。

「この世界の猛獣は、どんな奴らなんだ!？」

「そこか！ 大事なのはそこか！」

菅原を筆頭に、ツツコミ出す団員。

「さて、第一の動物ちゃんは、ライン君！ かつて、命名愛衣」
「いらんこと言わなくていい！」

反論した愛衣の前に、いつもの彼——ライオンのライン——がの
っしのっしと出てくる。

「さあ、ライン君を先に、よりうまく操れたほうが勝ちです。第一
ラウンド、ファイッ！」

志桜里の言葉に、いち早く反応したのは、レオーだった。

3 サーカス団、戦闘中。（後書き）

早くも主人公の影が薄くなっています（爆

いや、ほかの人が濃いのか……？

サーカス団、決断中。

しゅ、とレオーは床に落ちていたロープを振り回した。
その途端、ラインは何かにおびえるかのように縮こまった。

「……………おすわり」

レオーが人差し指を向け命令をすると、ラインは犬のようにおすわりをする。

勝者は、一目瞭然だ。

「しよ、勝者、レオーー!!」

志桜里がはじかれたように、慌ててレオーの手をつかみ、上にあげる。

まさに瞬殺だった。

「……………ま、負けた……………」

がくりと膝をつき、驚愕する愛衣。

「う、愛衣……………まあ、そう落胆するなって……………」

「陽斗に何がわかるのよっ! あたし、このサーカス団におこずか……………人生かけてんのよ!? クビになったら……………」

そこで、顔に手を開け、しゃがみこむ。

「う、愛衣ちゃん……………」

おどおどしながら、愛衣に手を伸ばす菅原。

「触るなきしよい」

「……!？」

突然の悪口にビビる菅原。

その悪口が聞こえなかったのか、同情をした志桜里が団長に駆け寄る。

「団長！ 我がトロイメライサーカス団の猛獣使いは、もう、約三年以上も愛衣なんですよ！ こんな急に変わっても、困ります！」

にやり。

愛衣の近くにいた菅原は、愛衣の黒い笑みに気が付き、数歩後ずさる。

「そうだな……じゃあ、猛獣使いは二人ということで、仮決定しよう。レオーちゃんは、一応正体の知らない怪しいものだしな。じやあ、本日は解散！」

ひらひらと手を振る団長に、心配そうな溜息を吐く陽斗であった。

「きまっただぞ、公演の日程！」

どう怒鳴りながら入ってきた団長の周りを、人が取り囲んだ。

「いつですか!？」

「何人入りますか！？」

「小道具は使いまわしですよね！？」

「給料は！？」

「さて、誰だどさくさに紛れて給料聞いたのは！　いつもと同じだ、それ以上を期待するのではないッ！」

手で制した団長は、団員の落胆する肩を見て、大きなため息をつく。

「つたく、我々の仕事は、人を楽しませることだろう！　金なんて生々しい単語、口にするのではない！」

えー、と唇を尖らせる数名に向かって、きつぱりと断言をした。

「いいか！？　給料はいつもと同じだが、そんなことを言い続けると、練習時間を増やすぞ！　日曜の休みもなしにするぞ！」

この脅しは効いたらしい。皆、お互いの口を押え、人差し指をたて、「黙れ！」と口々に言った。

「……………？」

ただ一人、練習の厳しさを知らないレオーだけが首をかしげた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2771y/>

ここのサーカス団には、異世界から来た猛獣使いがいます。

2011年11月17日17時05分発行